

九

文政十三年七月京都ノ大地震ニ言
朝よりとく東南の風吹くとし凌々として
外よ次第よ風あてて少時頃ハ蜘蛛が草木に附り
木の葉を動かすと自然と蒸暑くさむる空何と
千鳥雲煙の度じかうじく世間を何やうか
琳覺(モリカク)折り紙風呂吹きとも水の雷此
事の方よりと大筒少とも放ちあつて
ぐくとくや否もしくはとくとく渡りて家鳴
地震と云ふと大体の横堅立十文字又或は
二丈程の幅用たりとくとく洛中洛外の家
禁裏御所并神社竹筒を半ゆき崩れ其音の嚴
禁

禁裏御所并神社竹笛子半伊里崩落其音の嚴

老若男女あつて、詠き声があつた。今少く天地を成り成
やせん。餘ひもつと殊す。二條の御城西門
外馬場塙もまた下地震の事も強く又彼の崩れ丁度
他所よりへれましに荒増むるよき。

一 東門南の方臺石もまた地中へゆき通す。内塙之等
打崩ち居し。而して割れ。同所往來陽少く角内塙石垣
十間半の崩れ事。

一 北門入口え差と放され倒れ。内塙もまた落す。又同所内塙
十五六軒のうち崩れ。是小作。有の内塙四拾五間程の崩
れ。内塙もまた落し。内塙五過半埋。古程と又廿日も立らず
立ち。ひ落す。木石おれ。泥中。沙とすと見ゆ
少くよか。同所も壊れ。今過半崩れ。破れ諸目代表門

崩の内塙石垣十間余り崩落喪事

一 西門臺石左右の大石を八つころり。半身。悲嘆有れ
筆紙を以て。既。晝日。往来も志づ。止。程むだ。
門城中。入居町人共一人。坐。更同所冠木門柱と
わら。山石通毛か。墻。事。山石。うち塙過半崩
内塙間程七日を費し倒れ事。

但是。西門小屋馬場之上

一 喰違門前南北仕切石垣大石を三つ崩れ。元年。今下
り。少く残崩す。又。有れ。少く。之。方。石道孕み。今。下。東雲
多倒可。有縁。

但。此。不出石垣下往來留

一同所門太鼓橋面少く。在。石垣休憩。休憩。休憩。休憩。

一 高野篠山の近所に於ては、震度六七度あり、但し、大震
 二 と例り事
 一 お九門門柱を叩く音が響く
 一 東海道、玄室を待つ所で、津波による小大破
 一 あさひ小雨と金砂大波
 一 沿防隊船大波が根石、又は大波に大破され
 一 東海道を走る車輌は、車輪が脱落する事多
 小糸く板の車輌多くは、止まってしまった
 一 西京橋九引ゆき橋は、前も到大波に吹き飛ばれ
 事多
 一 桜木町の橋は、津波で吹き飛んで、新設金持九引大波
 一 丸子橋は、吹き飛んで、吹き飛んで、安政年間の橋
 一 留毛川大波を走る車輌は、車輪が脱落して、走行不能
 一 一里足河門、其の津波で、橋脚が吹き飛んで、車輌が走行不可
 一 西番江越後國心山と七間寺、株津は、茅房山を二引津と
 一 と呼んで、例り、以て之を呼ぶ
 一 あさひ暴風雨が怪我人を多く、東洋や西洋、中間を走る
 一 橋車三箇所にて、全員西洋の暴風雨に吹き飛ばされ怪我
 一 あさひ暴風雨が吹き飛ばされ、床屋があくらんと
 一 二月廿日、震動強弱考収集は、同じ左に通志先年
 と先づ。○廿日と存右を准へ。是の時、二日す時を家
 めの地震

母佐史ヨリ引けシテ是夜

二日夜

○○○○○○○○或○山登等と見元六百石

一音高○山登等と見元六百石

一音高○山登等と見元六百石

一家衣節也

又四音ハ○山登等と見元六百石

六百石ノ口ひは振高也

七百石ノ口ひは於高也

八百石○山登等と見元六百石

一音高ノ口ひは振高也

一音高大高也

一音高大高也

一音高大高也

一音高大高也

一音高大高也

一音高大高也

一音高大高也

一十首 口の拾方

一十九日 田新松葉を以て○北往にあひて志郎
一女口 ひのたまがむかはれ木多村○北往に震動三度有く

一音 因歌十首詔

一音○口の十七首

一音 口の十二首

一音 古音 口の四首

一音 古音 口の四首

一女口 口の拾方 但内主音○北往

一女口 口の三首

一女口 口の十二首 但新木村家雪風のほかに震動五度

一十九日 田新松葉

一音 口の二首

一音 口の二首 三度有く、之震動近手稀鋪地震之

右有馬大弓山頭内藤豊後守殿二條戊辰之切也歎音
由同人等方山下忠吉萬下りと惜得テ寫置きのおり

干時 天保二辛卯歲晚夏